

国立国語研究所学術情報リポジトリ

地名と人名の地理的關係：
行政域名と名字に基づく検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大西, 拓一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003042

地名と人名の地理的關係 —行政域名と名字に基づく検証—

大西拓一郎（国立国語研究所）

1. はじめに

「じゃがいも」を表す山梨県の方言形セイダユー（清太夫）のように物の名前に人名が用いられる場合、その語形は当該の人物にゆかりのある場所に分布する。一方、「じゃがいも」を表す静岡・愛知県の方言形コーシュー（甲州）のように物の名前に地名が用いられる場合、語形が表す場所から離れたところに分布する（図 1ab : Onishi 2018、いずれも赤い記号に注目）。

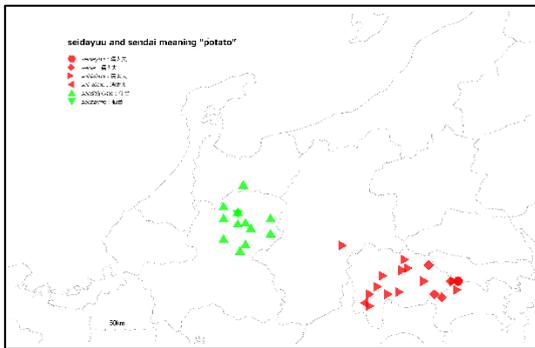


図 1a じゃがいもを表す清太夫の分布

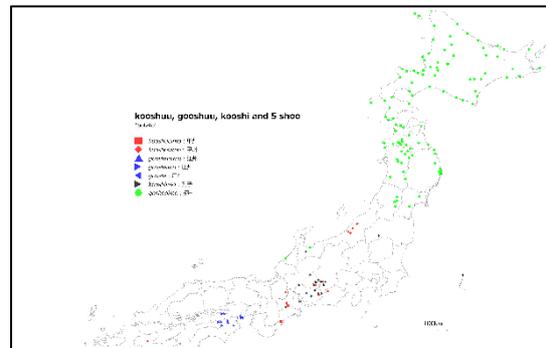


図 1b じゃがいもを表す甲州の分布

つまり、地理空間を基準にすると、物名と人名は近接するのに対し、物名と地名は遠隔である（大西 2019）。それでは、地名と人名はどのような関係にあるのか。このことを検討するため、(1)都道府県名と名字の分布、(2)任意の県内の市町村名と名字の分布、(3)令制国（旧国）名と名字の分布の関係を分析した。(2)については、いわゆる平成大合併後も比較的多くの市町村が残されている長野県を対象とした。名字の分布のデータとしては、従来の研究においても一般的な電話帳ソフト（電話帳図書館 Ver.13、日本ソフト販売：2013 年、以下、検索結果は電話帳データ）に基づき、行政区域ごとの分布を比率で較べるにあたっては国勢調査データを用いた。

結論としては、現代の広域（都道府県）、狭域（市町村）、歴史的広域（令制国）のいずれの場合においても、各対象域には同名の名字の比率は低く、人名と地名の関係は遠隔であることがわかった。ただし、これは全体的な傾向であり、個別に検討すべき対象も存在する。以上の基本傾向（2～4 節）と個々のケーススタディ（5 節）を論ずる。

2. 名字と都道府県名

都道府県名と（表記が）一致する名字のうち、件数の上位 20 名字について、各都道府県の世帯数の中での電話帳データの件数を割合（%：パーミル）で扱い、都道府県ごとのコロプレスマップ（階級区分図：Jenks-Caspall の自然分類）を描いた。上位 20 位に絞ったのは、21 位以下では全国の件数が 600 件を割り込み、有意な区分が難しくな

るためである。対象としたのは、以下の名字である（件数順、頭は順位、括弧内は件数）。

- 1 山口(83445)、2 石川(53740)、3 宮崎(31006)、4 千葉(27278)、5 福島(18764)、
 - 6 福井(13352)、7 長野(6739)、8 宮城(6630)、9 福岡(6277)、10 秋田(4854)、
 - 11 奈良(4760)、12 香川(3556)、13 長崎(3469)、14 山形(3469)、15 岡山(2843)、
 - 16 富山(2685)、17 熊本(1685)、18 佐賀(947)、19 広島(808)、20 山梨(784)
- 1 位の山口と 14 位の山形の分布を図 2ab に示す。

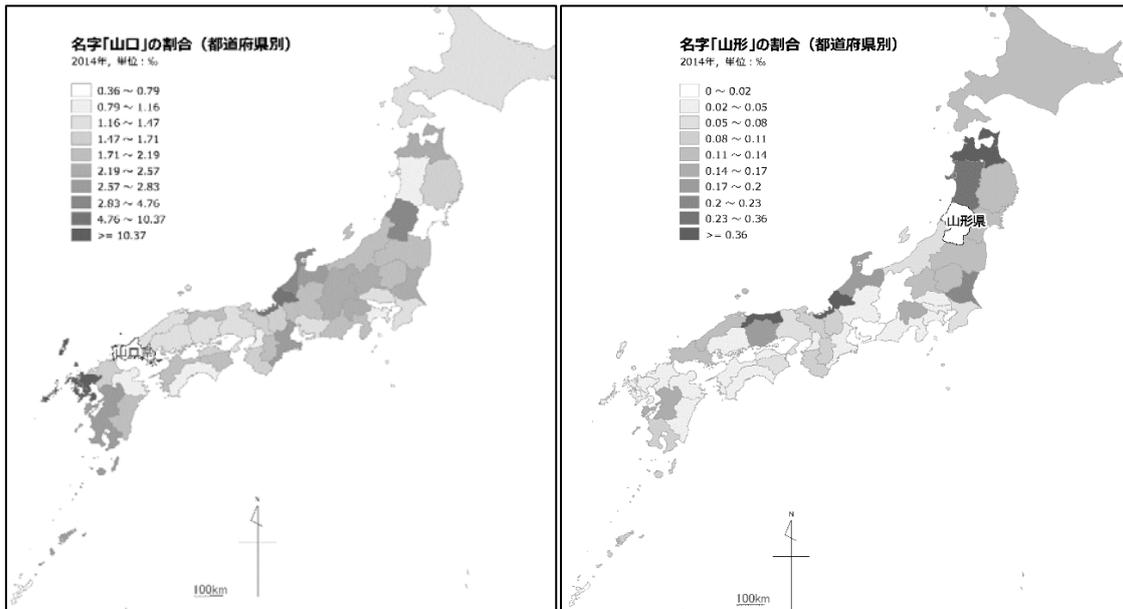


図 2a 「山口」の分布

図 2b 「山形」の分布

一部の例外を除き、ほとんどの名字が、図 2ab と同様に対象となる名字と同名の都道府県での割合は低い。例外は 8 位の宮城と 16 位の富山であるが、富山の場合は、「とみやま」も含まれている可能性がある。今回用いた電話帳データでは、読みが与えられていないので、確認はできなかった。

3. 名字と市町村名—長野県—

長野県内の市町村名（77 種）と一致する名字について、電話帳データ件数上位 25 位（27 種）について、異表記（例・長野・永野）も含め、市町村ごとの割合を地図化した。なお、28 位以下では、異表記を含めても総件数が 50 件未満となり、有意な区分に基づいた割合での比較が困難となる。

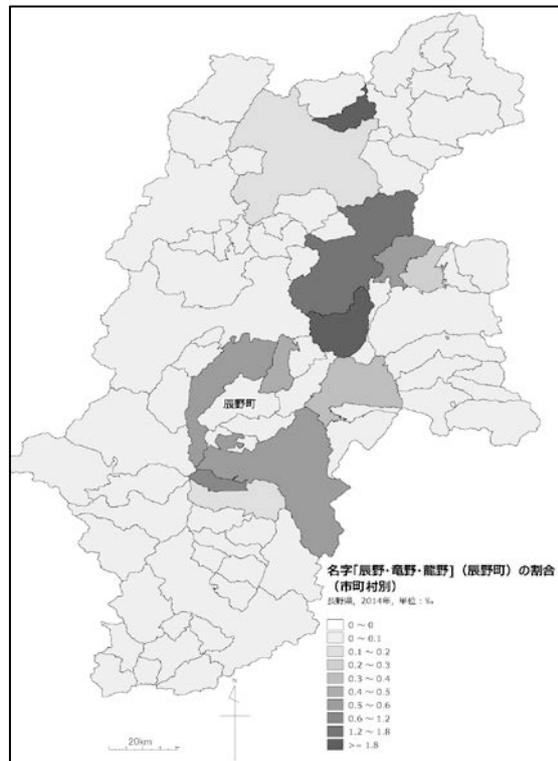
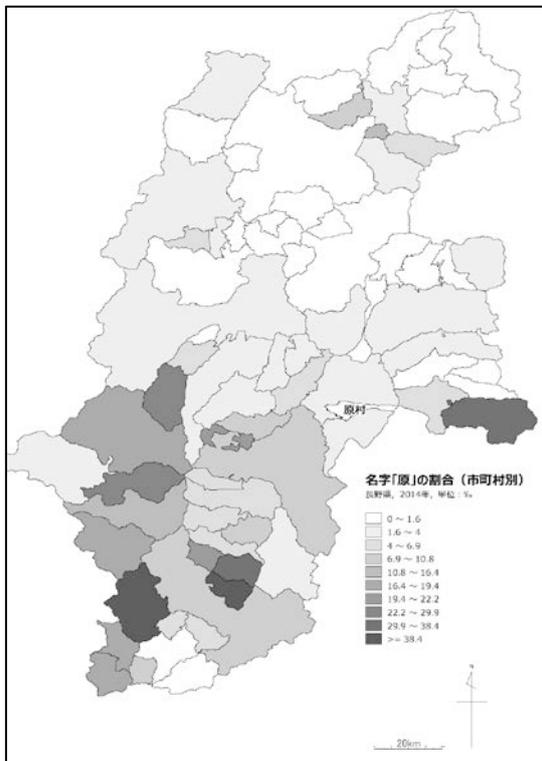
対象とした市町村名と異表記・総件数は以下の通りである。順位 市町村名（名字・異表記：件数）で示す（同名を含む市町村名は、箕輪町・南箕輪村のように列挙し、異表記のある場合は異表記の総件数を示した）。

- 1 原村(原：3000)、2 青木村(青木：2304)、3 池田町(池田：2031)、
- 4 松本市(松本・松元：1276)、5 飯島町(飯島・飯嶋・飯嵩・伊井島：1097)、
- 6 高山村(高山：928)、7 喬木村(高木・高城：877)、
- 8 川上村(川上・河上：792)、9 中野市(中野・仲野・中埜：779)、

- 10 小川村(小川・小河：674)、11 茅野市(茅野・千野：579)、
 12 上田市(上田・植田：404)、13 飯田市(飯田：397)、
 14 中川村(中川・仲川・中河：384)、15 宮田村 (宮田：324)、
 16 野沢温泉村(野沢・野澤：305)、17 南牧村(牧・槇・槇・真木：251)、
 18 辰野町(辰野・竜野・龍野：204)、19 下條村(下條・下条：176)、
 20 箕輪町・南箕輪村(箕輪・蓑輪・蓑和・蓑輪・蓑和：131)、
 21 長野市(長野・永野：118)、22 松川町・松川村(松川：109)、
 23 諏訪市・下諏訪町(諏訪：96)、24 朝日村(朝日・旭：86)、
 25 上松町(上松：81)、26 小布施町(小布施：61)、27 高森町(高森：54)

やはり、電話帳データでは、たとえば上松では「あげまつ」も「うえまつ」は区別できない。

1位の原村(原)と18位の辰野町(辰野・竜野・龍野)の分布を図3abに示す。



この場合も多くのケースで市町村には同名の名字の分布は少ない。例外は、8位の川上、10位の小川、19位の下條であった。なお、異表記を含めた場合と含めない場合については、分布の様子に大きな異なりは確認されなかった。

4. 名字と令制国(旧国)名

2節で扱ったのは、近代以降に設定された都道府県名であった。ここでは歴史的地域区分である令制国(旧国)名について、名字の分布を検討する。扱うのは、次の総件数

が 700 件以上の上位 22 名字である（括弧内は、電話帳データの総件数）。

- 1 上野(26838)、2 甲斐(9710)、3 河内(4970)、4 和泉(4007)、5 山城(3615)、
- 6 大和(2727)、7 対馬(2368)、8 加賀(2168)、9 下野(2111)、10 日向(1869)、
- 11 伊勢(1842)、12 近江(1569)、13 若狭(1378)、14 能登(1359)、15 伊賀(1310)、
- 16 肥後(1105)、17 大隅(1077)、18 越後(802)、19 土佐(759)、20 播磨(728)、
- 21 淡路(728)、22 佐渡(727)

電話帳データの性格上、令制国ごとの割合を求めるのは困難なので、都道府県ごとの割合で分布を示す（令制国の位置は ArcGIS が公開しているデータを用いた）。電話帳データの読みは不明であるが、1 上野の多くは「こうずけ」ではなく、9 下野も「しもつけ」はほとんどなく、10 日向には「ひなた」も含まれていると考えられる。

3 位「河内」と 16 位「肥後」の分布を図 4ab に示す。

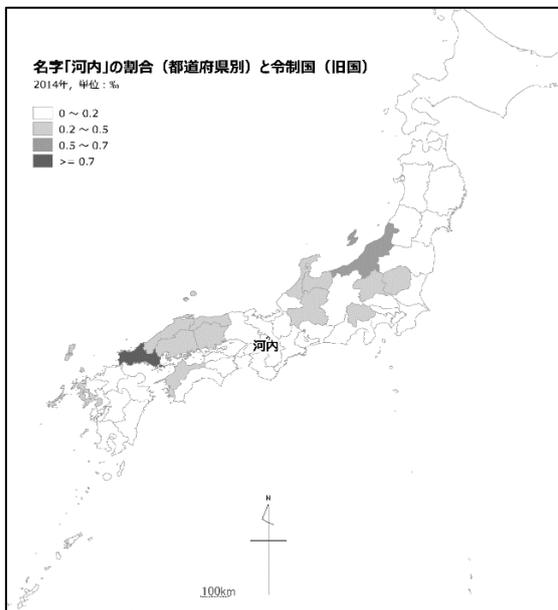


図 4a 「河内」の分布

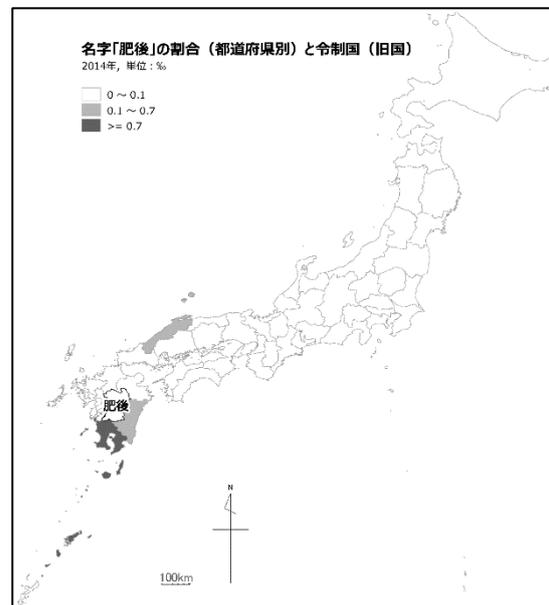


図 4b 「肥後」の分布

令制国名の場合、例外なく各国名地には、同名の名字の分布は少ない。

以上のように人名と地名の関係は遠隔であることがわかった。この背景には、名字が地名をもとにすることが多く（豊田 1971 : 16・163、柳田 1936 : 38・49・55）、さらに移住先で元の地名を名乗ること（柳田 1939 : 132）が理由の一つとして考えられる。

5. 名字と地名のミクロコスモス

場所（地名）と名字の間には、遠隔の傾向が強く見られるが、個別に考察すべきことも多い。

5.1 望月

府県を越えて考察すべきケースがある。武光（1998 : 109）は、山梨県に多い「望月」が長野県の望月村（現在は佐久市に合併）から移住して広まったとする。図 5.1 のように山梨・長野の両県を合わせて見ることで、このことが確認できる。

5.2 今井

長野県内における今井は、市町村ごとではあまり明確ではないが、岡谷市内の行政区(大字)ごとに見ると、今井区において20%近く(198.6%)あり、この区内に集中している(図5.2)。詳細に扱うなら必ずしも「遠隔」とは限らないこともあるので注意したい(今井は、室町期の新開発地であることによるとされる(今井区1990:53))。



図 5.1 山梨県・長野県における「望月」の分布

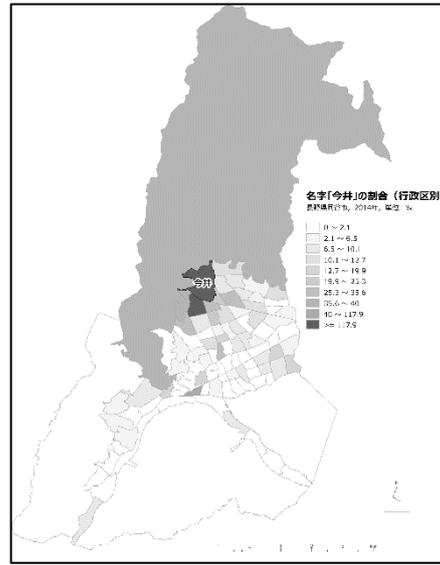


図 5.2 長野県岡谷市の「今井」

6. むすび

地名と名字の地理空間上の関係は、広域(都道府県)でも狭域(長野県)でも遠隔が原則であり、歴史的な令制国では例外なく遠隔が確認される。一方で、都道府県を越えた領域や大字レベルの微細領域を対象にすることで、地域史にアプローチできる。言語地理学の一分野として、地名・人名の分布研究は、大いに開拓の余地がある。

引用文献

今井区(1990)『岡谷市 今井区誌』今井区

大西拓一郎(2019)「日本におけるじゃがいも方言の分布と変化—弱い固有名詞の強い力—」The 2nd The Northeast Asian Sea Region and Humanities Networks International Conference, Pukyong National University, Korea.

武光誠(1998)『名字と日本人』文藝春秋

豊田武(1971)『苗字の歴史』中公新書

柳田国男(1936)『地名の研究』古今書院(講談社学術文庫版(2015年刊行)から引用)

Onishi, Takuichiro. (2018) Japanese dialectal words for imported produce that include proper nouns: *morokoshi* (“China”), *nanban* (“southern countries”), and other place or person names. Komatsu Round-Table Conference on Geolinguistics.

付記 本研究は JSPS 科研費 JP 16H03415 の助成を受けたものである。